

【げんちゃん】

去年の夏にのう、「肝試し」ちゅうのをやったことがあるんじゃ。
学校帰りに友だち七人で、やるぞいやるぞい、と決めたんじゃ。
晩飯くって、親の目ぬすんで、校門に集まるって約束にしたんじゃ。

参加したの二人だけじゃったがのう。

元ちゃんと、わし。

元ちゃんは、優しい顔をしているんじゃが、わしよりもずっと、こわいものしらずでのう。

夜の学校ほどこわいもんは、なかなかあるもんじゃねえぞい。

それなのに元ちゃんは、平気で校舎にはいっていくんじゃ。

わしか、わしは、懐中電灯片手に、元ちゃんの背中で【おんぶおぼけ】になっておったわ。

怪談じゃねえ、階段をのぼってのう、二階の廊下に足を踏み入れたとたん、廊下の突き当たりに、青白い光が見えたんじゃ。

「ありゃ、なんじゃ」

と元ちゃんにきくと、

「ありゃあ、月の光が反射しとるんじゃろ」

「つきなんか、でとらんぞい」

というと、

「今ぞゆく、今ぞゆく」

元ちゃんは、ずんずん先に行ってしもうた。

「まてまて、まてや」

わしが叫ぶと、

「待てん、待てん」

と元ちゃんが叫ぶ。

「なぜに、まてん」

「それはつまり」

と元ちゃんは振り返ったもんじゃ。

その顔の恐ろしいことといったら、懐爺が屁をこいたときとおんなじじゃった。

「つまり、なんじゃ」

「つまり、おれがおぼけだからじゃ」

「なんじゃと。げんちゃんは、おぼけの【げんちゃん】かい」

わしが怒鳴ると、

「すまんのう」

といいながら、元ちゃんは青白い光のほうに進んで行き、そのまま光に呑み込まれてしまったんじゃ。